



リステラス星圏史略
古資料ファイル 2-1
『女神たちの物語』



(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 & 土岐真扉

《 大 地 世 界 》
物 語

[大地世界物語 ～上古編～ I](#) 2006年3月29日 [連載](#) [コメント](#) (3)

はじめに女神が選ばれた。
女神は仲間を呼集した。
花々星々のすばるが如く、
女神の仲間が集まった。

[大地世界物語 ～上古編～ II](#) 2006年3月30日 [連載](#) [コメント](#) (1)

女神の名前は《自在に踊る》。
四界の一つの主神となった。
多くの仲間の助力を受けて、
無限で無窮の大地を成した。

[大地世界物語 ～上古編～ III](#) 2006年3月31日 [連載](#) [コメント](#) (1)

歌って踊って笑って食べて、
女神と仲間は大地を巡った。
泉を呼び出しみどりを育て、
虫とけものとヒトを創った。

[大地世界物語 ～上古編～ IV](#) 2006年4月1日 [連載](#) [コメント](#) (2)

副主神たる《智水神》、
女神を愛すと仲間の噂。
ところが女神は恋をした。
被造物たる、ヒトの子に。

[大地世界物語 ～上古編～ V](#) 2006年4月2日 [連載](#) [コメント](#) (1)

ヒトも応えて女神と結ばれ、

やがて女神は双子を産んだ。
半神半女のやんちゃと泣き虫、
みる者すべてを笑顔にさせた。

[大地世界物語 ～上古編～ VI](#) 2006年4月3日 [連載](#) [コメント \(1\)](#)

とつぜん魔族が攻め込んだ。
大地に戦の備えは無かった。
女神は必死に防いだが、
多くの仲間が奪われた。

[大地世界物語 ～上古編～ VII](#) 2006年4月4日 [連載](#) [コメント \(1\)](#)

女神の夫が深手を負った。
女神の悲嘆に耐えかねて、
副主神たる《智水神》、
身代わりとなり* 帰天した※。

* その界における神格としての聖別命数（存在権限）を委譲し界を去ること。

※ 神格の帰天は、いわゆる人格の「死」とは異なる。

[大地世界物語 ～上古編～ VIII](#) 2006年4月5日 [連載](#)

女神は己れの未熟を悟り、
救いと裁きを祈り求めた。
四界を見守る《月天女》、
請いに応え境界路を鎖す。

[大地世界物語 ～上古編～ IX](#) 2006年4月6日 [連載](#) [コメント \(1\)](#)

女神も己が命数を分け与え、
大地の真芯で眠りについた。
女神の娘が統治を引き継ぎ、

人の地道な暮らしが始まる。

(女神たちの物語)

人々は かの女神 が 動くにつれ
光を放つように見、
音を聞いたように思い、
女神の持つ “何か” を
知らぬうちに 感じ取った。

道において すれちがい、
言葉を 交わし、
触れることも
見降ろすことも
自由にできた。

常人と
なにも 変わる事 なく
女神は 暮らした。

それでも
人々は 彼女が
神々しく 力有る者
なることを かいま見た。

神話や昔話に形容詞が少ないのは、
あとから消えたのではなくて、
「書けない」、
または「書くだけムダ」な事を
知っていた から。

2006年7月1日 連載（2周目・大地世界物語）

女神の目覚め

まず溶岩が流れ熱を持った蒸気が吹きつける中で女神が目覚めた。しかし女神は自分が何者で何のために目覚めたのかを忘れ、地が冷え、いくどかの大変動のあと冷たい荒野に大森林が育つまで思い出すことができなかった。

やがて初めての朝日の中でマリアンはリーシェンソルトの呼びかけを聞き、自分が民を造り国を整えるために目覚めたことを思い出した。

目覚めの森

女神の目覚めを祝福しに何人かの聖霊があらわれた。

そのうち春風の精が女神の「国造りを始めるにあたって何をしたらよいでしょう？」との問いに答えて森の木々たちを目覚めさせて彼らと相談することをすすめた。

（この時の会話が地上で最初に交された言葉であり、後に人間たちによって魔術語（マリカルロック）と名づけられた。）

女神の呼びかけに答えて起き出した森の木々たちのうち何本かが《歩く》力を所望したので女神は願いをかなえた。

彼らが《森人》たちの始祖であり、この森を《目覚めの森》と呼ぶ。

木々たちは女神が国造りを始めるのによい土地を教え、木という木全てが女神の味方となることを約束した。

『創世記（創成期）概要 (2)』 （中三、とノートの手紙に書いてある☆）

2006年7月1日 連載（2周目・大地世界物語）

森の木々たちに国造りを始めるべき所として示された土地について女神は清らかな泉でのどのかわきをいやした。

すると女神の手からこぼれた水から水人が、口からあふれたしずくから水小人が生まれた。

『 創世記（魔法世界創世記） 』

..... 大地の誕生 から マドリアウィ王朝の確立 まで

序章 大地の手

- ・ 女神の疑問、空の誕生、精霊たちの出現、眠りそして起きる、大地の変動、蒸気、雨、海や陸ができる、森が育つ、雲がきれる。

2006年7月2日 連載 (2周目・大地世界物語)

P1. 序章 大地の手 (この世のおこりから)

ドロドロとした金色の溶岩がたがいにつつかりあい、うずをまいて流れていました。まだ誕生したばかりの若い大地、若い世界の中心で彼女は目をさましたのです。

彼女は大きな石の上に一人で横たわっていました。

不思議なことに、見渡す限りの黄金色のうねりの中で、ただ彼女と彼女の石だけが動きもせずになづかな白光をはなっています。

そして彼女は背の下の石を通じて、伝わってくる大地の鼓動を、まるでその手で触れているかのようにはっきりと感ずることができました。

しかし彼女はそういったまわりの風景を気にもかけず、横たわって両手を胸の上に組んだまま、ただその深い漆黒の二つの瞳だけを開いて考えていました。

まっすぐに上を見上げた彼女の瞳には星も雲も何一つとして映りません。

それもそのはず誕生したばかりの世界にはまだ「空」という場所すらできていないのです。あるのはただ空虚な暗黒のひろがりだけでした。

彼女が目覚めてから すでに長い長い時が過ぎていました。

そして彼女は 目覚めた時からずっと同じ事を考え続け、いまだに思い出すことができずにいるのです。

その事は幾千回も彼女の頭の中をかけ巡り、そして いつも答えを得ることなく、また出発点に戻るのです。

「私はだれで 何処から来たのだろう。そして何のためにここに こうしているのかしら。」

今も鈍い黄金色の照り返しの中で彼女は同じ質問のために自分の記憶を探っているのです。

ふと気がつくと、今まで音もなくうねる金の波以外動くものとなかった世界に「何か」の気配が表われ始めていました。

それはまるで草原の中をかけぬける荒々しい風のように、それがまきおこす草のうねりを見、体に触れられたのを感じることではできても目で見ることではできないのです。

その「何か」がかもし出す不思議な感覚は彼女に母親の胎内にいるような安心を与えました。

「さあ、次には何が始まるのかしら？」

彼女は確かに何かが始まるに違いないと思いました。

背中の石はあいかわらず規則正しく大地の鼓動を伝えています。

と、突然 はるかかなたの波間がパッと輝いたと見る間に、もり上がった大波を二つに裂いて青い明るい光が地の底から上りました。

そのただ一条の光線はだんだんとその輝きを増し、ついには常人の目ではとても正視できないだおるといほどに明るく輝いたのです。

そして、さらに高く、まるで純粋な光でできた塔のようになって上へ上へと伸び続けて行きました。

彼女は別段眩しいとも思わずにその異様に美しい光をながめていました。彼女にとってはその不思議な光景はごく当然のなりゆきのように思われ、それどころかそうなることをあらかじめ知っていたような感じさえするのです。

光線は天空高く真直ぐにつき進んで行きます。

距離もわからぬ程 遠くにあるにもかかわらず、その上から下までを一時にとらえるのは不可能になっていました。

彼女が、「これ以上 高くなるようだったら完全に視界を突き抜けてしまうわ」と思ったちょうどその時に、まるで何物かに突きあたりさえぎられたかのように進むのをやめました。

そしてその地点から水平な円盤状に広がり始めたのです。

地底からの光はやみ、ただ光の塔がぐんぐん上昇しては広がっていきます。

そしてあれだけ強烈だった光もひきのばされるにつれてじょじょに弱まってくるのです。

うねっている波の上の暗黒界は消え去りました。

今は深い藍色の美しいけれど冷たい夜空が世界を覆っています。

そしてまだ月も星もない空の下（もと）で それ自身の創成よりもさらに不可思議なできごとが起りつつありました。

先程あの光が発せられた ちょうど 同じあたりから大きな とても大きな かるく握られた《手》が地中深くよりさし出されたのです。

たしかにそれは《手》だと思いました。

彼女には最初それが見えなかったのです。

それは金色の波をかきわけでもなく、かといって突き抜けているわけでもなく、波と同時に存在しながら けして交わってはいませんでした。

金色の溶岩と まったく同じものであり、そしてまた まったく異なるものでもあったのです。

そして光に対して反応しませんでした。

つまり目で見るとしては何も見えず、心の瞳を開いて心像（イメージ）としてそれをとらえなければなりません。

それは大いなる者の持つ《手》、……もしかしたら大地そのものの手であったのかもしれない。

《手》はその大きな手のひらをじょじょにとき放ってゆき、手の上の指と指の間より光り輝やく者たちが翔び立ちます。

彼らは光り輝く丈高き美しい人々でしたが、それらもやはり心像（イメージ）で、心の瞳を閉じて目で見ている限り何一つ見ることはできないのでした。

一人、二人……、彼らは次々と翔びたっては思いおもいの方向へと去って行きます。

全部で二百人ほどもいたでしょうか、最後にひとときわ明るく輝やく黄金（こがね）と白銀の二人が、開ききった手のひらより高く弧空へと翔び去って行くと、大いなる《手》は彼女に優しく会釈して再び地中へと姿を隠しました。

大いなる《手》より放たれた輝やかしき聖霊たちによって、地上には力が満ちあふれていました。

聖霊たちは空間より力を吸収し、また自己の内より発散させ、おのおのまったく違った動きを示しながら、なおかつ注意深い瞳には彼らが一連のひどく複雑で巧みな踊りをふんでいることに気づくのでした。

彼らは、それぞれ自分がやるべきことをこころえているようで、みな 忙しくたちはたらいっていました。

そのうちの一人が 踊りながらツイと彼女の石のそばへやってくると彼女が瞳をひらいているのをみつけて、やわらかく微笑して言いました。

心像（イメージ）だけで実体を持たないのでから、その声ももちろん耳には聞こえません。

ただ 心地良くすずしげなひびきが 直接 彼女の頭の中に流れ込んでくるのでした。

「おやすみなさい」と、その人は云いました。

聖霊たちの話す言葉はとても複雑で、そしてまるで音楽のように詩のように リズムを持ってひびくのでした。

「 おやすみなさい、マリアンドリーム
神々の仕事は まだないわ
神々の時代（とき）はまだこない
さあ おやすみなさい 目を閉じて
あなたの目覚めの時代（とき）がくるまで
大地に森が 茂るまで 」

来た時と同じようにツイと踊りながら聖霊は行ってしまいました。

あとにはまた深い眠りに落ち込んだ彼女がのこりました。

彼女は聖霊の言葉の意味を考えようとしたのですが、聖霊の言葉には魔力があり、目覚めたばかりの彼女には抗（あらが）うだけの力がなかったのです。

次に彼女が目覚めた時には すでに長いながあい時が過ぎ去り、目に見えない聖霊たちはその仕事の半ば近くを終えてしまったように思えました。

それというのも彼らの仕事というのが天の下、地の上の空間に空気と海と固い大地を造って植物を育て、森を茂らせることであり、彼女の周りには あちこちに高いむき出しの山が並び、遠くには鈍い灰色の無限の水面が広がっていたからです。

彼女はさむざむとした岩肌や冷えた溶岩のかたまりに目をむけました。心の瞳でそれらを透して見てもどこにも聖霊の姿はありません。

彼女は横たわったまま目を閉じて広く探索の輪を拡げました。地の上を端から端まで探し、さらに地の下、空の上とじょじょに輪をひろげて、はるか地の下の方に（といっても大地の根底よりははるかに表面に近いところですが）膨大な量の熱エネルギーが貯わえられていることに気づきました。

そして、聖霊たちの約半数がそこに集まってなにか忙しそうに立ち働いています。なにをしているのかは遠すぎて見えませんでしたので彼女は聖霊の一人に焦点を合わせてその心に話しかけました。

彼女は遠く離れたものを見、そして心と心で直接話すことができたのです。

2007年6月5日 連載 (2周目・大地世界物語)

P1.

概 略 ・ 創 世 記

昔々、神人（かみびと）の長（おさ）なる女神（ドライム）マライアヌがこの地に来たる時、大地は、まだその姿を定めず、うなうなと優しいこがね色にたゆたい、たゆたい、見渡すかぎりにもどろんでおりました。

それから長いながい年月（としつき）のあいだ、女神はひとつの巖の上に一人で眠っておりました。

そうしている間（ま）に地は熱く猛（たけ）りまた凍（い）てつき、その繰り返しの内に、聖なる大地の霊から空とそれを司（つかさ）どる霊が生まれ、無慈悲な虚空を追い払って母なる大地の囲みをかためました。

それから、大地のおもてより、幾たりかの水乙女たちが抜け出でて白い雲、黒い雲、灰色の雲となり、星々の目から大地を護って、女神の目覚めのその時までひたりと動こうとはしませんでした。

うねり、また炎を噴き上げ、身震いをし、大地はゆるゆるとその形を整えてゆきました。

×

×

また長い時が過ぎて、ようやく女神の目覚めの日がきました。

女神が目覚めた時、東の地平から雲が退き、太陽は初めてこの世界を見ることを許されました。

彼女はやさしいままの姿で朝陽の祝福の輪の中に立っていました。

~~彼女にとって大地の新しい姿を見るのが初めてなら、自分の新しいからだを見るのもこれが最初のことでした。~~

~~彼女の名前はマリアンドリーム。~~

~~かつて、幾度も生まれ変わり生まれ変わりして、まだ普通の人間であった最後の一生に、彼女はその同じ名で呼ばれていました。~~

~~それから、彼女は記憶を失わない者、この世の外にあってこの世に含まれる者、不思議の探求者、彼ら流に言えば“真実を探す者”の一人となったのです。~~

P2.

女神は、まず、空気から着物を作ると、そのまま歌いながら歩いてゆきました。
ちょうど六節歌ったところで三羽の渡り鳥が現われました。
「渡り鳥、渡り鳥、私（わたくし）の兄弟たちはどうしました。」
「姉君様は光の国（エルシャムリア）に」
「双子の弟君は地球星（ティカセルト）に」
「兄君様は空虚の洞窟（ボルドガスドム）に」
「それぞれ国造りを始めておられます」
それを聞いて、女神は真赤な血を燃やし、紅蓮の炎から三羽の鳳凰鳥を作って尋ねました。
「そして私（わたくし）はどこにいます？」
「大地（ダレムアス）に」

それから鳳凰たちは女神（ドライム）の目覚めを兄弟神たちに告げに飛び立ってゆきました。

(☆平城京風、というか山田ミネコ風のハルマゲドン・シリーズ風...A^-^;)...薄桃色の肌着に青碧色の衣装に、朱色の袖くくい紐と軽翠の地金に金の鈴が輪状になった飾り鈴クシロを身に付けた、黒髪巻毛に翠の瞳のマライアヌの図、あり。シャーペン描きに色鉛筆塗り。)

P3.

女神は更に歩いて行って、土から六人の人間を作り、マルダノビメ、マライヒメ、サルルヒメ、クルスタカワケ、オルノミコ、アスタイラツコと名づけました。
これが今日の大地の国人（ダレムアト）の始まりであります。
女神はこの地をハジメノハラと名づけ、それから七十二たび、お山の上を太陽が横ぎるまで（※1）そこにとどまって、人間に食物を与え、言葉を与え、考える力を与えて、喜びと悲しみと愛することを教えました。

生まれる者、死んだ者、女神の庇護のもとに人の数は三十と六人になっていました。

ある日、女神はさびしさ、と、いう感情を思いだしました。
大人が乳飲み児の世話だけでは生きていくことができないように、女神もまだほんのわずかな感情しかしない幼ない人間たちの間では孤独な存在でした。

「いまぞ時は至れり。」

女神は立ちあがってそう言うと、まだごく小さい大地（ダレムアス）の世界をとりまく深遠なる淵を超えて、遠く、遠く、心の輪を広げ、深く、深く、呼びかけました。

きてください

きてください

きてください

きてください

わたしの仲間たち
きてください
きてください
きてください
きてください

※ お山、つまり後に時の果てまで山と呼ばれるようになるかの山の頂上はハジメノハラから見ると、一年に一度、春分の日には太陽がからない。

P4.

真実を求める者よ
わたしのそばへ
わたしの国へ
ただ東の間であらうとも
一時（いつとき） この国 わたしと共に
一つの道を
共に！

それからまた長い時が過ぎて、女神は“誰か”が大地（ダレムアス）にやって来たことに気づきました。

一人、また一人。

別の世界、別の宇宙、別の大地より、さながらほうき星のごとく輝く尾をひいて、女神の呼び声に応（こた）える者たちが、次々と大地（ダレムアス）の懐（ふところ）に集って来ます。

遂に女神（ドライム）マライアヌのもとにそろった神々は三十と五（いつ）柱。

ここに大地の国（ダレムアス）の最初の神人（かみうど）、三十六神がそろったのです。

「我々は何をしたらよろしいでしょう。我ら六人をのぞけば、皆、我らの仲間に加わったばかり。何をなすべきかを知りませぬ」

「どうぞお指し図を、マライアヌ」

「……この大地（ダレムアス）は、生まれて間もない、若い国なのです。若い世界に若い者が来て国を造る。なんの怖れる事があるでしょうや。

わたくしとて国を造るような大いなる業（わざ）をなすのは初めてです。が、これが我（われ）らに与えられた課題ならば、必ずや見事になしとげてみせましょう。」

（女神のうしろななめ横顔のイラストあり）

P5.

ここに至って、神々（こうごう）しい集団に驚いて物陰に隠れていた人間たちがようやく顔を見せました。

「まあ心配はいらないのですよあなたたち。このかたがたは、わたくしの仲間。これからわたくしと共にあなたたちを導びく役目をします。あなたたちは、わたくしたちから様々な事を学ぶでしょう。そうすれば、もう今までのような純粋な幸福を手にする事はなくなるのです。……この大地の国（ダレムアス）は人間の国。やがてわたくしたちに替わってあなたたちが大地の国（ダレムアス）を統べるようになるでしょう。

今、大地の国（ダレムアス）の歴史が始まるのです……。」

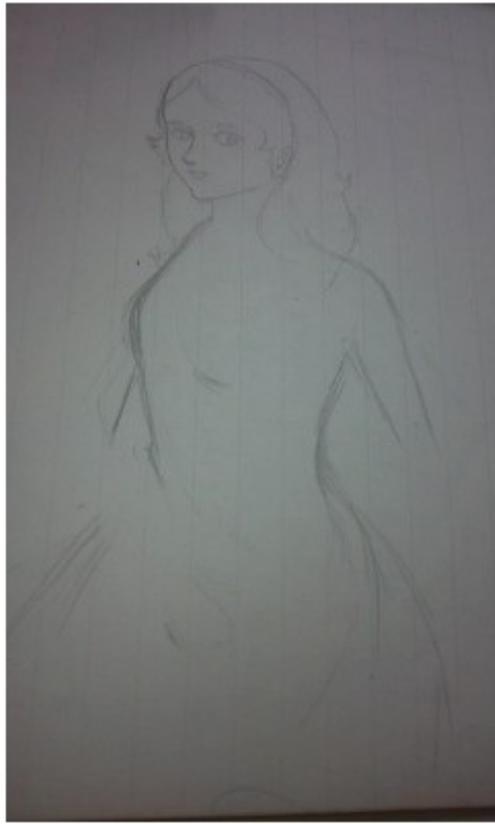
（誇らしげに語りかける女神のイラスト、描きかけ☆）

(承前) (作業メモ) 2016年1月20日

(承前) (作業メモ)

2016年1月20日 リステラス星圏史略 (創作)





大地世界物語 第一部 女神と神々

第一夜

のちの世の大地世界、辺境地方の
母親たち、祖母たち、
また父親たち、祖父たちは、
〈この世の始まり〉とはこのようであったと、
子どもらに話した。

むかあし、むかし。
最初のむかし。

ママワガという偉い偉い神様が、
大地の奥の奥の奥にいて、

ぽんぽんぽんぽんと勢いよく、
元気な四つ子の卵を産んだ。

四つの卵は世界の卵。
マンマワァガは考える。

四つの卵に子守りがいるね。
はてさて、誰に頼もうか？

かあさんここまで名調子。
だけど末子が大地を叩く。(*)

「かあさん、かあさん、卵を産むなら、
マンマワァガは小鳥なの？」

かあさん笑って咳払い。
「そうだね、そうかもしれないね」

すぐに上の子ことばをはさむ。
「卵を産むなら蛇かもよ？」

「蛇の卵は四個じゃきかない。
亀の卵も山のよう。」
兄さん賢く意見を言えば、

姉さん大地をぽんと打つ。
「わかった、そんならトカゲだよ。
トカゲの卵は三つか四つ。
自分で育てず陽に任す。」

なるほど子どもら頷けば、
母さん声あげ大笑い。
世界の卵の母だもの。
大きなトカゲにちがいない。

婆様すかさず歌いだす

「むかあし、むかし、最初のむかし……」

まんまわあがというえらいえらい
大地の奥の奥にいる
大きな大きな美しいウロコもよりの
偉大なトカゲの神様が
ごろごろ　ごろごろんと
大きな四つの世界の卵を産んだ。
けどもかみさま子育て嫌い。
誰かに子守を頼もうね。

ひとつめ卵は賢い姉神に
ふたつめ卵は剛毅兄男神に
みつつめ卵は愛くるしい妹神に
よつつめ卵は末弟に。
これが大地の世界の始まり、始まり。

ばあさま息継ぎ、そのすきに
母さん負けじと歌い取る（※）

いもうと女神は喜んだ
たいそうたいそう歓んだ
跳ねて転げて歌って躍った、
「世界の卵を貰ったわ！」
女神が歓び歌うので
仲間の神々やって来て
一緒に跳ねて、歌って躍った
「世界の卵を育てよう！」

女神が歌うと、大地ができた。
仲間が歌うと、泉が湧いた。
女神が躍ると、天空ひらけ、
仲間が躍ると、日月湧いた。
タンタタ、
タンタタ、
タンタタ、
タン！

「たんたた、たんたた、たんたた、たん！」
この物語が歌われたときにはいつものことですが、
音律につれられて子どもたちと若者たちがいっせいに
神々と一緒に踊り始めてしまったので、
焚き火のまわりは賑やかに、
手の舞い、足の踏むところもたりないほどになりました。

みなみなそれぞれの大好きな神になりきって
たいそうな舞の名手ぶり。

とうとう眠くなってしまった婆さまが
焚き火に灰をかけました。（＊）

「今日の語りはもうおしまい。

続きは明日、またあした！」

『 四国神（よんこくしん）物語 概略 』

（@中学1～2年？or高校？ 大学ノートにシャーペンで縦書き）

2007年6月6日 連載（2周目・大地世界物語）

さらに時代は下って、ハジメノハラには人間の“国”と呼べるだけのものができあがりしました。ハジメノハラの北西にあたる山地のはずれ、なだらかな丘陵地帯のふもとに築かれた神宮（じんぐう）マドリアノビ（マドリアナビ？）を中心に、暖かな地方に向かって肥沃な畑や、実り豊かな水田が広がり、その所々に、いくつかの村、いくつかの町、いくつかの庄がありました。

神宮殿（マドリアノビ）はそれだけで一つの都市であり、同時に一つの家であって、工芸や建築にたけた神々が何年もかかって造り上げた美しい都（みやこ）でした。

塔や二階建は少なく、土地の起伏に沿って、点在する小さな白い館を三つ四つ、五つ六つと渡り廊下でつなぎ、中庭表庭なども含めて生け垣や白い土塀で囲いました。

とりわけ長い廊下には優しい東屋をもうけ、垣と垣の間や中庭や広場などには質素な輝きを持つ石段や石畳の細径小径。大道、大路には泉水や、虹のようなたいこ橋、目もあやな歌舞殿などが随所に設けられていました。

マドリアノビができて数十年たつと、神々は異世界へ通じる“道”の扉を除々に開け放ってゆきました。

まず初めは女神マライアヌの姉リーシェンソルトの治める

（※未完※）

『最初の不死人』概要（「中三」）

『最初の不死人』概要（「中三」、とノートの表紙に書いてある☆）

2006年6月4日 [連載（2周目!・上古神代～水の大陸）](#)

神々の王であり、ダレムアトックの造り手である女神マリアンドリームは、ある祭りの日に、キューピドの神の造った塔の魔法によりダレムアトの王たる者の息子と出会い、恋に落ちた。

女神は永遠なる命を捨てて彼と結婚することを望んだが、神々はことごとく反対し、王の息子たるダレムアトに永遠の命を授けて神々の一人とすることを勧めた。

しかし女神は自分の定めた掟を自ら破ることは出来ないとしてこれを拒否した。

女神の決心を変えることが出来ないことを知った神の一人が自らの命を断つことによって、自分の不死なる命を青年に与えた。

その神は女神を愛していた。

「女神マリアン！」 (中2)

「女神マリアン！」 (中2. 演劇部室で塗り絵にされていた落書きw)

2015年12月5日 リステラス星圏史略 (創作)



「祭の日」

マリアンドリーム「まああなた、そんな所で何やってるの?!

もうみんな広場へ集まっていますよ」

ー女神マリアン!! いや、キューピッドの魔法を試していたんですよ。

マリアン・ドリーム「キューピッドの...?」

ーご存じなかったんですか?

「初代王マルドリスタン」！ 2015年12月18日

[>「初代王マルドリスタン」<!](#)

2015年12月18日 [リステラス星圏史略](#) (創作)

...あ～... (^^;) ...☆

やっと発掘できた。忘れきってたこの名前...

<http://76519.diarynote.jp/200607170218170000/>

初代王マルドリスタン

...つまり、「女神マリアンの夫となった人間」ですが...

第 二 夜

のちのちの世に大地界を訪れた球地人《楠木律子》は、その手記のなかでこのように大地の神話を書き残した。

「大地世界の神話」聞き書き・一

昔々、四世界の元となった〈界卵〉を「産んだ」のは、始源界の女神《わんがまあま》。

その一の球を預かったのが《リースヒェン・サラル》、叡智界の女神。

その二の球を拝領したのが《グ・アヒィ・ギルグ》、暗洞界の男神。

その三の球を賜ったのが、我らが大地の主女神、《マライアヌ・デア・ドライム》。

その四の球を任せられたのが、末弟、と呼ばれる《ていあす・らある》。

のちに四界の境界監視に配置された仮の守護神が、月女神《レ・リナルディ・アイム》。この神は始源神《わあがまんま》の腹心で、ここまでが「掌界神」という位を持つ。

大地の世界の源である界の卵を賜り、それを無窮の大地の世界となすと定め育てたのが、大地界の主女神《マライアヌ・ディア・ドライム》。

その大地の世界に「泉がいるでしょう？」と、やってきた第二神が、知神とも呼ばれる治水神《ヨォーリヤ・スウィルトウイト》。この男神はまた大地の副主神とも呼ばれた。

地がひらき泉が湧くに際して「緑が欲しいよね？」とやってきた女神が、大地界すべての樹木と草花の母とも呼ばれる女神《あるまーりえ・えるー・むーりあ》。この神はまた主女神の親友であり、大地界の幸運数である「第三女神」とも呼ばれ、慕われる。（同じ「第三」だが、主女神とは別の女神である。）

四番目にやってきたのが、すべての「うごくもの」の守である両性の神《タ・マル》。

この四神を「大地の世界の四主神」と呼ぶ。上級の神々である。

大地の女神《マァ＝ライア》のもとに豊穰なる土壌と砂礫と岩石と地盤と岩盤と岩山や山脈などなどの〈めったに動かぬもの〉たちを育て保つ下位の神々が群れ従い、治水神《ヨォ＝リーヤ》のもとには泉や小川や滝や大河や沼や湖や海や、靄や霞や霧や雨や雪や雹や霰や風や嵐などの〈つねに動き回るもの〉たちを司る下位の神々が群れ集い、緑の神《ア＝ルウマ》のもとにはすべての樹木や草花や苔たちやを守り育てる下位の神々が寄り集い、命の母《タ＝マァ》のもとにはすべての生命を育み見守る神々が集まり集った。

大地世界の子どもたちの命名のさいにしばしば語頭に〈マ〉〈ヨ〉〈ア〉〈タ〉の音が付け加えられるのは、これらのそれぞれの神々の守護を望むことを意味している。

「大地世界の神話」聞き書き・二

四主神たちと下位の神々とは実際には分け隔てられることも支配や指図を受けることもない気軽で対等な間柄で、和気藹々と群れ集い、歌い踊り楽器を奏し、笑いあい愛しあいながら世界を広げたと伝えられている。または、昼はそれぞれの作業に分かれそれぞれに歌いながら額に汗して大地を広げ生き物を育てる作業にいそしみ、夜は群れ集って野営を築き、よごと歌い踊り宴と祭をくりひろげて物語や器楽のうでを磨き、披露しあいながら、大地を育てる巡幸の旅をつづけた、とも伝えられている。

そのなかで神々や精霊達が特に気にかけて好んでいた噂話があった。

本来なら〈始めの四世界〉のうち一つを賜り、その界主神になると目されていた実力者《ヨオ＝リヤ》が、《マア＝リア》と離れがたく思うがために界掌神の位を蹴って大地界の副主の座を選び、格下の女神の補佐役にまわったのではないか、という憶測であった。

当の大地女神は笑って「まさか！」と答え、治水神も笑うばかりで内心を明かすことはなかったが、神々と精霊たちと樹族や草族たちはことあるごとに集まっては、その秘かな恋の進展に憶測をめぐらし、あれこれと物語り、やきもきと気をもみ気を回したりするのが常のことであった。

ところですべての〈うごくもの〉の母である《タ＝マア》とその眷属たちは、小さき命から初めて順々に、ありとあらゆる這虫や羽虫や鳥や獣や魚や獣種人たちを生みだし育て増やしていったが、ついに自分たちの姿に似せた二本足のつるりとした生き物を生み出すところまで進んでいった。

そのころには無窮の大地世界の上にも下にも緑の命が満ちあふれ、そのさなかに生まれ出たばかりの二本足二本腕たちは「女神の愛し子」を意味する〈マ・リアヌ〉（＝人間）と名付けられ、大地と泥のなかをころげまわりながら、元気に育ち、愛し合い、子どもを産み育てて、いきおいよく増え始めていった。

そのマリアヌたちのうち特に新しく生まれ育った若者らが、見目よく利発で素直なよいできばえであったので、《た＝まあ》は、その頃すこし離れた場所で《大地の背骨山脈》を育てていた大地造営を業とする神々らのところへ、自慢がてらに見せに連れていった。

「まあ…」大地の主女神はうっとりとした。

「あの黒髪の巻き毛の男の子がとても気に入ったわ。私に育てさせてくれない？」

女神があまり熱心にその人間の子どもを溺愛するので皆が少し呆れて見ていると、数年ほどして、女神がこころ笑いながら言った。

「私、妊娠しちゃったわ！」

下位の神族と上位の人族とが性愛をもって交わることは異界においては先例がないでもないとはいえ、やはり界主神ともあろう高位の女神の放逸に、大地界の神々と精霊たちは驚倒し、まずとにかく水神ヨオリヤの心情を案じたが、当の水神は「そんな気はしていたよ。」と、にこにこ笑いながら女神の豊穡を祝うばかりで、傷心のようには見られなかった。

次に神々は上界神マンマワガの心証を案じたが、これもまた「おのが界内では好きに振る舞うがよい」と容認したとの報を伝え聞いて、大地世界の神々からもまた安堵して半神半人の愛子の誕生を祝う支度を始めた。

ただ、秩序と潔斎を好む知求界の主神リーシェンソールだけはこの放縦を秘かに忌み、それ以後、大地世界への訪問が絶えた、と伝えられている。

とき満ちて女神はすこやかな娘を産み落とし、《半神女マァ=リス・テア》と名付けられ、大地世界のすべてのものたちから愛されておだやかに育っていった。

女神の娘の父親たる男人はその誠実なる人柄と女神への敬意から、自然と人族マリアヌの束ねの長をつとめるようになった。その彼を深く愛し、ながく我が元にとどめたいと願った女神の界寿命を分け与えられて大地界では初の《長寿人》となり、わが娘の緩やかな成長をむつみ、女神と誠心誠意をこめて穏やかに愛し合い、幸せな暮らしをしていた。

大地と山脈はすこやかに広がり、緑は豊かに伸び育ち、動くものらは自由に遊び回り、神々と精霊族と人族や樹人たちは、日ごと夜ごとに愛を語り合い、食べ呑み、歌い踊った。

このころが大地世界のもっとも豊かで笑いに溢れた時代であったと語り伝えられている。

『 魔法の国の戦い 』 (@小学校4～6年?)

[『 魔法の国の戦い 』 \(@小学校4～6年?\)](#)

2007年6月7日 [連載 \(2周目・大地世界物語\) コメント \(1\)](#)

魔法の国の戦い

序章

ダレムアスと三つの国々

はるか昔 四つの国あり

四つの国 治める 四人の神あり

四人の神は兄弟で、

宇宙の神の子であった。

四人の神はそれぞれに

別の世界を治めていたが

魔法を使い 行き来した。

一番上の姉君は

気高き女神 リーシェンソルト

治める国こそ エルシャムーリア

天使が暮す 気高き国よ

二番目兄君　ダーギング

世界でもっともおそろしき

ボルドム軍を指揮しておった

ああ　ボルドム軍こそ悪魔の国よ

三番　弟　アスールは

人間たちを　治めていたが

すごいよくばり　いばってた

最後の四番目　妹君が

治めていたのが　ダレムアス

妖精、人魚、魔法使い、

だれでもここに住んでいた

リーシェンソルトとダーギング

たいそう仲が　悪かった

ある時ダーギング 女神に聞いた

「姉君リーシェンソルトよ、

なぜ、私（わたくし）のボルドム軍を

エルシャムーリアより追いだしたのか？」

女神は答えた弟に

「私の国は天使の国、

そなたの家来の悪魔ども

いれるわけにはいきませぬ」

かくてダーギングの いかりは はげしく

ボルドム軍を けしかけて

貴（とうと）き エルシャムーリアを

一夜のうちに ほろぼした

しかしダーギングのいかりは おさまらず

なげき悲しむ姉君を

世界の果ての魔の山の

氷の室（むろ）に閉じこめた。

それ以来、

三つの国は つながりを通し

「時」は静かに歩（あゆ）んで行った。

悪魔はどんどん ふえて行（ゆ）き

ついに 地球まで占領したが

それでも まだまだ ふえつづけ

ダレムアスに魔の手がのびた。

かくてダレムアスに戦いは起こる。

女神 マリアンドリーム (中2かな?)

女神 マリアンドリーム (中2かな?)

2015年12月11日 リステラス星圏史略 (創作)



「大地世界の神話」聞き書き・三

神界において女神マライアを親しく教え導いていた姉神リーシェンソルトは秩序と純潔を重んじる性格で、豊穡にして自由な大地世界では神族と人族の恋慕も混血もありという放縦を快く思わず大地への訪いも途絶えがちとなり、ひきこもって天球界の奥深く、学求と瞑想のみの日々を過ごすようになった。

これを不興としたのが闇洞界ボルドムの長、男神グアヒギルグである。この神はかねて女神リーシェンに邪恋を抱いていたが、清冽な女神は鬪争と流血を好む武勇の神を忌避し、暗洞界に足を踏み入れることは絶えて無かったため、男神が女神にまみえる機会といえ、ともに大地世界の祝祭などを訪れるときしか無かったからである。

女神がますます気むずかしい日々を送り、恋情に耐えかねた男神が天球界を訪問すると冷たく門前払いを喰らうばかりで、ついに逆上して暗洞軍を率いて界境を侵し、力づくで攻め入り、これを遮ろうとした天球族らを情け容赦なく血祭りに上げ、女神のこもる奥城へと押し寄せた。

あまりの掟破りに女神は憤って即座に天球界の存続を不可とし、現界での写し身を放擲して魂の輪廻回廊へと神去り帰還してしまった。男神がこれを嘆き悲しみ、女神の亡骸を抱いて身も世もなく泣き喚き、おのれの苦しみに対する報復として、天球界をことごとく焼き滅ぼせと自らの軍に命じた。

はじめ闇洞界軍はまっしぐらに奥の院をめざし、そこから逆に攻め広がってきたので、光球界の周辺部にいて自力で界間を渡ることのできた者たち、とくに翼光族と飛仙族らは、危急を告げ救いを求めるために急ぎ大地世界へと界廊を渡り落ちのびた。

ことを聞いて驚愕した大地女神が光球界へ向かい、兄を厳しく諫めると、逆上した兄神は、光球界を瞬時に殲滅せしめた闇洞大軍を、血に飢えた勢いもそのままに、大地世界へと送り込んだ。

大地に戦の備えなどなく、あるのはただ器楽と舞踊を愛し楽しんで生きるための大地の十箇条の一、「食べないものは殺さない」という基本の掟だけであった。

「あんな不味そうなもの、食べられない！」

押し寄せてくる敵の大群をみて神々と人々は慨嘆して一斉に逃げ出し、動くことを厭う樹人族

たちもこのときばかりは一斉に根を抜き枝を振って大地の上を疾駆して逃げ出した。

もちろん力あるものは振り向き振り向きして強風を起こし激流を湧かせ、大地を裂き、断崖絶壁を穿って押し寄せる闇軍族を追い払い攻め防いだが、数の極まりを知らぬ敵たちをひとりも殺すことなく防ぎきることは不可能だった。

兄神は泣き叫ぶ妹神の腕を掴んで引き留め、そのさまを見せて娛しみ哄笑していた。

逃げ遅れた大地の一族の弱い群を救出するために馳せ戻った強い者らが、追撃する闇軍に追いつかれて討ち滅ぼされた。その時、敵陣に倒れようとする大地女神の夫をとっさに、水神が庇い、落命した。

事態の収束を太神マンマワガに訴え請うた。太神は裁定者として高位の女神《レ・リナル・ディ・アイム》を遣わし、

大地世界物語

第二巻 女神の遠き孫

大地世界物語

第三巻 皇女戦記

大地世界物語

第四巻 大地と地球の物語

『木と木の葉』

2014年7月12日 リステラス星圏史略 (創作)



<http://ja.wikipedia.org/wiki/J%E3%83%BBR%E3%83%BB%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%82%AD%E3%83%B3>

リステラス星圏史略 古資料ファイル 2-1

<http://p.booklog.jp/book/102572>

著者：霧樹里守 & 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102572>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102572>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ